講座

學校教育法における幼稚園（三）

——講習筆記——

倉橋惣三

前號
二、學校教育法における幼稚園の目的（下）
（は）心身の發達の助長
（に）環境による教育
三、學校教育法における幼稚園の目標（上）
（一）序說
（二）幼稚園の保育目標の一
（い）健康の爲の日常生活の習慣
（ろ）安全の爲の日常生活の習慣
（は）幸福な生活
（に）先生による安全感

五　學校教育法における幼稚園の目標（中）

（三）幼稚園保育目標の二と三

先日述べた目標第一項は、健康の問題であつた。時代が變り教育が變つてもこれが大事である事は云う迄もない。第二項、第三項は社會的と云ふ事でひつくるめる事が出來る。第二項は園内の事であり、第三項はもう少し廣い範圍の事である。

目標第二項は「**國内において集團生活を經驗させ、喜んでこれに參加する態度と協同自主及び自律の精神の芽生えを養うこと**」となつている。

（い）幼稚園と社會性の教育

幼稚園の本來として、社會的と云う事がその特有な教育目標と考えられていた位である。たとえば、よき家庭であれば幼稚園はいらない。そこにあらゆる遊園設備を設ける事は何でもない。一人の人間としての情操を養うとすれば、母親が幼稚園の先生以上の技術を持つ樣になる事も出來るかも知れない。しかし家庭教育には狹い教育という缺陷が起り易い。これに反し、幼稚園特殊の教育效果として社會的訓練と云う事があげ得るのである。家庭には同じ年齡の子がいない。若しそれを呼んで來たとしても、所謂お學友であつて眞の仲間にはならない。そこで幼稚園が必要だといわれる。ところで目を廣く轉ずれば、古い教育では個人的教養に偏り、それが主となるのが傾向である。この前も、幼稚園の目標に關するこの項目中に、修身的の言葉が少いと云う事を云つたけれども、身を修めると云うのは個人的である。精神修養という事を重んずる修身では自分と云うことに注意が集中する。これはいい事であるが、しかし、あまりに個人的に自分を省みる一方では、自分のおかれている社會のことが忘れられる事がなきにしもあらずである。世には他人に對しておせつかいな人がある。これはいわば淺い性格とも見えたりするが、その反對に、自分をのみ考えこんで深刻にひつこむ人もいる。これも尊い事である。しかしその方は適當にバランスがとれなくてはならない。「おのれを思う事深ければ人を忘る」というこの事がかりに云えるとして「身を修めるに急にして世から離れる」とも云うこともあろう。「修身それから齊家…」というのは非常に論理的である。しかし、いつ身が修まるであろうか。身がすつかり修まつてしまつて、これでできあがつたという事はないであろう。そうすればこれは空な論理上の事で實際にはなりたたぬといつても暴言ではあるまい。すなわち自己中心的から社會に及ぶよりも……他を思う生活がむしろこちらに及んで來る順序もありうるのである。私はトルストイの著書で讀んだ事がある。トルストイは哲學的な人である。彼は書齋で本を讀んでいる時、窓の外の坂道を車が通るのを聞けば、自分の修養をやめて車の後押しをしに行く方が急務だといつたようなことがあつた。このように、おのれ中心の修身教育も大切ではあるが、しかし他との關係を中心として行く教育も大切である。そちらがむしろ先ではないかとも考えられる。もう一つ、その同じ事を子供について考えてみよう。大人については、わけても老人にとつては、逆の事が必要になるかも知れない。手をとると自分の生活に卒業したような氣がして、ずうずうしくなり人の事が目につきおせつかいになる。つまり「おばあさんたら、人ばつかりさそわないで自分でおまいりに行つたらいいのに。」と云うような事もでてきがちでもある。ところが子供の場合は自己修養という事はむつかしいのである。よく幼兒に自己修養を說いている先生をみかける。「身に省みて恥ずるところなきや」などがそれであるが、幼兒にできる修養はむりにおしこんで內へ內

へと行くのではない。自分に愛情があるかどうかより、生活の實體をして、あの人と仲がいいかわるいかであり、親切の心よりも、實際車を押してやるという事である。この場合、世につくす事に於いて身を修めている。てつとり早い實際である。つまり、身を省る間もなく實際生活の處置をやつて行く方が端的である。この意味で今日の教育は修身的よりも社會的になつているといえる。殊にそれを力説するのがアメリカの教育である。アメリカの教育では「人間は考えているひまに、社會の爲に何かつくすというのが先きだ。卽ち、修身的目的よりも社會的目的である。これを英語ではソーシャルパーパスという。勿論こういうアメリカの教育は、その根本において、我を神に結びつける宗教を持つている。その上においてこういうのではあるけれども、兎に角大いにソーシャルパーパスを重んずるのが傾向である。上大學より下幼稚園にいたるまで教育はソーシャルパーパスを主とするといつている。これは、日本從來の東洋的教育については參考になる考うべき問題である。少くも幼稚園では、この方が生活的である。幼稚園では可能である。又幼稚園でも個人的ふれあいで人間教育ができる場合もある。これもしなければならぬのであるが、「園」という所では園という廣い面に於ける教育をなさなければならない。つまり「集團生活を經驗させ、一人一人が教育を受ける爲に集つて來るというよりも、集つて集團生活を經驗するために來るのである。幼兒にとつて集團はおもしろい。つまり衆と共にいる事を喜ぶというだけで、幼稚園の存在は充分價値があるのである。さてこの簡單な社會生活の上に、組織だてられた集團生活が出來るが、必ずしも道德的な事を云つてはいない。集團生活の中にいるということその事が大切なのである。幼兒の中には、集團生活にはいれず、集團生活の樂しさを知らず、集團生活の外に自分を置く傾向の子がないでもない。或は又社會的ひくつ性、社會的ごうまん性、社會的ずる性の子もいる。それらの子に明朗な社會的集團生活を經驗させるだけで大きな意義がある。幼稚園の遊戯は、體の爲とか心の爲とかがあるが、皆といつしよにいる樂しさが第一である。いつしよに唱歌を歌い、いつしよに繪をみるという事は、唱歌、繪本そのことよりもいつしよというところにわれわれは意義がある。教育というとすぐ何でも道德にしてしまうが、幼兒は道德よりも前に先ず人といつしよにいる事を樂しんでいるのである。

（ろ）集團生活の經驗

更に進んで、ただその中におかれるのを樂しむのみならず、自ら進んで、その樂しみに入ろうとする。それが「參加」である。參加というのは積極的である。ただ「いれとくれ」というだけでなく、自分がその中に一枚加わつていくのである。ただ、集團生活に所屬するだけの事ではない。五六人で砂を掘つている。そこに一人加わつて「ぼくはこの山に木を植えるよ」と一役買うのである。大きな言葉を使うとデモクラティックな生活は、この參加の態度から始まる。日本のデ

モクラチツクは、ただ公平という意味に解されるが、積極的には參加する態度なしに眞のデモクラチツクはない。アメリカでいうサーヴィスである。例えば皆と共に話しをきく、その場合めいめいがそれに自分の考を出す。中には話を亂す子もいるし、又或は座持ちだけがよく、皆の話に調子を合わせる單なる社交家もいるが、參加とは受けているのみでなく、銘々が貢献、寄與しているのである。これがあれば親切にもなる。親切があるから參加するのでもあろうが、積極的參加があるから親切になるということにもなる。但し參加の積極性が強すぎて、協同にならないのは困る。或子は靜かな協同性が強く、或子は積極的參加性の強いという差もあるが、この兩方は平均がとれていなくてはならない。我國の今までの女性に對する批評で言つてみると、集團生活を樂しむ事に缺けている人はない、協同するという事もある。ただ參加する事がどうであつたか。尤も參加を通り越してでしやばりとなる人もある。これは女性に限つたことではない。

次にそういう社會生活をしていく事に於て、自主的自律的精神が養われる。理くつの上では自主自律から集團へという方が順のようであるが、實際は逆に集團生活から自主自律が生れるのである。その場のやりとりが主になつて、自律が養われるのである。ここで殊におもしろい事は、「集團生活を經驗させ」とは幼兒として一ぱいに社會的に生活させるのであり、「參加・協同・自主・自律」は芽生えを養うとことわつてあることである。幼兒期において、社會參加、協同、自主自律が完全にされたらば、それは怪物である。幼兒が無邪氣な集團生活を經驗するのは、自然の社會性にもとづいてできるから先にさせて、協同自主自律の芽生えにもつていくのである。「何はともあれ集團生活の經驗をおさせなさい。そうすればそのうちひつこみじあん、がむしやら、わがままの子でも、協同自主自律の芽生えが養われてくる」という譯で、普通の個人の修身の逆の論法でいくのである。

（は）社會訓練の一要點

もう一つ大事な點を述べよう。今まで社會訓練をするという時に、どうかするとその集團のまとまりの中に自分をおく訓練が主になつたようである。集團は簡單なところから發達し、それから次第に、まとまつた集團生活になつてくる。その場合には、まとまりついた生活にならなければならない。しかし集團生活がまだ幼稚なもので、その中に幼兒がただあどけなく居る時、すぐちやんとしたまとまりの中にいさせようとするのは無理である。まとまりは自分の組を組として思うことである。それから集團の利益を考えるというようなことになり、進んで他の集團との關係を思うようになる。これは發達した社會生活としては大切な條件だが、幼兒には無理である。幼兒はその組という物を、先生が思うほどりんかく的に考えない。幼兒の經驗する社會は、それを一つのまとまりとして把握するのでなく、集團の中で相互の關係を營んでいるのである。しかも、これが社會生活として大切なことで

ある。相互の關係が經驗される事なくして、集團對自分の關係だけが意識される時、全體主義的となる。デモクラチツクな生活として、集團の爲につくすというのは、集團の中味の爲につくすのである。隣人を省みる事が集團につくしている事である。集まつた、そろつたということのみ思うのは全體と自分の關係である。それに比して、隣に誰がいる誰がいると、互の關係が次第に集つて集團となるのがデモクラチツクである。即ち、こゝで「集團生活を經驗する」とは「集團生活を集團生活として經驗する」というのではない。集團の中の互の關係を經驗させるのである。互が親しむ事なしに全體を主とするのは、悪い意味の全體主義である。日本を愛するが故に隣人を愛すというのでなく、隣人を愛するが故に、その集りとしての日本を愛することになるのがデモクラティックな考え方である。發達したおとなとしてこの考え方は兎に角として、幼兒の場合には互を愛する事が先であり、その方が先ず可能である。それをとびこしてしまつて、集團に所屬させる事は無理である。そういうことでは、眞の社會性は養われない。つまり、社會生活をさせることによつて、自ら個人性が養われるようにするのが、幼稚園がねらつている大きな點である。

理解を助ける爲にもう少し云えば、民主主義的教育では、「社會的」という事をいたる所でいわれている。それぞれの場所で異るのではあるが、小學校目標第一にも社會性を目標としている。（學校内外の社會生活の經驗に基き、人間相互の關係について、正しい理解と協同、自主及自律の精神を養うこと。第二はまとまりの方に入つているがやはり社會性を扱つている。（鄕土及び國家の現狀と傳統について、正しい理解に導き、進んで國際協調の精神を養うこと）中學校の目標にも三つとも、社會性の教育である。高等學校も年齢で變つて來るが、三つの目標とも社會につくすことのできる人間をつくるのが目的である。これらの一貫した社會人教育の基礎となるものとして、幼稚園の社會性教育が大切なのである。

（に）社會事象に對する正しい理解と態度

幼稚園の目標に歸つて、第三項は「身邊の社會生活及び事象に對する正しい理解と態度の芽生えを養うこと」となつている。社會とは實際あるものである。現實の事實として幼稚園をとりかこんでいる。その事實が幼稚園の中にとり入れられてくることは必要であり有效である。一體に今日の學校は學校の中だけで教育するのみならず、學校以外の社會によつても教育するのである。學校教育といつても、骨が折れるものならかくべつ、つい手近か否足近かの處にある。これを重んずるのがアメリカである。われわれも園外保育ということをしていないではないが、何か特別の行事のようにして行われる風がある。アメリカでは特別のこととしてゞなく、郵便局なり、消防署なり、電車が通つている町の街路へつれて

行く。そしてお話でもなく畫でもなく、その實際をのみこませる。これはわれ〳〵の幼稚園でもやるべきである。小學校、中學校でやるような組織的なものはむつかしいが、幼兒は幼兒なりにそうした社會現實を教育する事ができる。それを幼兒に與えるには二つある。一つは實際の社會につれて行くのである。金魚を買い花を買う場合、幼兒のいないうちに買つておいて、幼兒が來た時驚かし喜ばせるのも一つの心もちだが、金魚屋や花屋へ（社會的現實）つれて買いに行けばいいではないか。金魚をみ花をみるのは生物學であるが、金魚屋が社會である。家庭でもおかあさんが子供をつれて買物へ行くのもその一つである。道草は一般に惡いとされているけれども、教育的に指導されればいいのである。しかし幼稚園では多勢つれて行くとたいへんである。先生はいつでも全體のまとまりに於いてつれて行こうとするから無理が起る。小人數にしてつれて行けば何んでもない。スタンレーホールの書に「自然をもつてくることができなければ自然へつれて行け」とある。今までの教育では學校の中でやらなければ教育でないと考えていた。町で行われているのは現實である。學校の中へもつてきた物は「物」である。やはりつれて行くより仕方がない。こういうことを、アメリカではエクスカーションとかトリップというが、これを遠足・散歩・見學何れの言葉に譯してもぴつたりこない。遠足といつて近い所へ行くのは變である。散歩というとぶらぶらしているようだし、見學では固すぎる。それからまた、折角トリップをさせるのに、「これから町へつれて行く、行つて見てきて覺えていらつしやい。歸つて描くから」などいう先生があるが、餘計のことである。

さて以上の社會生活とは表面的であつて、見て歩くと云うのは舞臺を眺めているようなものである。更に進んで人と人との交渉をみる必要がある。交番をみるというのは、巡査がどんな洋服をきているかの知識でなく、人間交渉を見るのである。生活の事象に對して理解するとは、物をみると同時に、人と人との交渉をみるというのでなければならない。

「正しい理解と態度」ここは子供がやつているのでなく、見ているのだから理解である。正しいとは何であろう。消防のおじさんがどんな服を着て、おまわりさんがどんな服を着ているか、それを繪に畫く時は間違つてはいけないよというだけではない。消防夫を、巡査を、どんなに理解するかということである。これには先生が正しい知識で說明する必要がある。幼兒は屢々正しい理解を持つていないからである。例えばおまわりさんというと「こわいよ」という。これはデモクラティックな社會に於ける警官に對する正しくない理解である。「ぼくは泥棒でないからこわくないよ」というのも、何れも正しくない。われらの爲に治安を守つていてくれるという事は、交番に巡査が立つているのをみただけではわからないかもしれない。先生がそこを正しく話すのである。消防の小父さんは赤い自動車に乘つてウーウーといく、それだけが正しい理解ではない。電車の車掌は屢々幼兒の理想である。

毎日觀察していて、自分でも切符を切りたい、切符を賣りたい、運轉したいと思い、甚だしいのは「ただで乘れるよ」など思つている。これらは、それらの人達が社會の爲にしているというソーシャルサーヴィスがわかつているといえない、それをどういうふうに正しき理解に導くかは先生の仕事である。ところで、こういう話をおかあ樣の集まりですると、家の中ばかりで遊ばせている子を外につれて行かねばならぬというので、ねえやに子供をつれてゆかせる。これでは正しき理解を與え得ないかもしれない。ねえやはおまわりさんはこわいものとしてしまうであろう。電車もただで乘りたいと思つているかも知れない。

そのソシャルサービスの理解から、社會的感謝にうつつて來なければ充分正しい態度とはいえない。日本ではこの人人に對する社會的感謝は行きとどいていない。日本人は佛や神に對する以外に感謝しようとしない。ここに「ユーアンドアイ」という本がある。アメリカでよく讀まれるものを飜譯したもので、幼稚園よりはもう少し大きい人の爲のものであるが、その第一編は「日本の國の中にたつた一人しかいないとすると、そのたつた一人があなただとすると、……」という書き出しではじまつている。われわれは、一人になると、なんでも自分のものになつていいなと思うがそうでないのである。社會にはいろいろな人がいて、われわれの爲にサーヴィスしていることを知り、それに對するソーシャルサンクスを感じなければ、社會生活の正しき態度とはいえない。私の昔作つた幼稚園唱歌「郵便屋さん」「渡し場の船頭さん」「道ぶしんの工夫さん」等はこのソーシャルサングスの歌である。郵便屋さんは大切な信書を家毎に配達するものなりというのは正しい理解であり、今日もきてくれたというのは感謝の態度である。「道ぶしんの工夫さん」は、昨日はあすこまで今日ここまでと進んだ。あの人達のおかげで道がよく歩けるのだというところに感謝がある。「渡し船」も村と村との間に橋がないので、いつも朝早くから渡してくれる船頭さんの感謝である。幼稚園の先生は子供に社會の現實を知らせ、それに對する正しい解釋態度を與えなければならぬ。少くも間違つた態度をなおす任務がある。幼稚園外の社會というと擴がるようであるが、幼兒はいつも社會的生活の中にいる、殊に、われわれは社會をどう利用しようと考えがちであるが、幼兒はそんなことは考えない。素直な社會觀を持つている。又われわれは社會道德を敎えられ、社會義務として苦しい事に考えがちであるが、子供は素直に社會そのものを受ける心持でいる。その幼兒に社會の有りがたさ、社會の與えてくれる便宜をふうわりと感じさせるのである。

前の幼稚園令では觀察があつた。それには自然現象のみならず社會現象の觀察も含まれていた。しかしそれには科學的敎育の方がつよく、正しい社會的敎育は行われていなかつた。今度の幼稚園では社會的敎育の方が強い。